

「カワイイ」研究の発展⁽¹⁾

佐々木隆

プロローグ

竹久夢二美術館で2016年3月31日(木)～6月26日(日)に「100年前に夢二が発信♥大正時代の『かわいい』展～乙女がときめくデザイン&イラストを中心に～」が開催された。⁽²⁾

なお竹久夢二美術館HPには次のような告知文が掲載されている。

海外でも近年高く注目される「Kawaii(かわいい)」ですが、大正ロマンを象徴する画家・竹久夢二(1884-1934)は、自身がデザインした小物を大正時代に“かあいい”という言葉を用いて紹介し、暮らしや装いにいち早く彩りを添える仕事に才能を発揮しました。また大きな眼と、華奢で丸みを帯びた姿形を描き表した可憐な少女像の〈抒情画〉を確立し、日本近代の女性が憧れる「かわいい」世界を、夢二は時代に先駆けて表現しました。



さらに夢二は、おしゃれなデザイン画や素朴で微笑ましいカット絵、加えて愛らしい子供絵も手掛け、現代にも通じる「かわいい」を数多く残しました。

本展では今から100年前に夢二が発信した「かわいい」を集めて広く展示紹介するとともに、大正時代を中心に夢二が展開した「かわいい」の役割についても考察していきます。⁽³⁾

日本の「かわいい」文化が世界に飛び出し、kawaii, cawaii とと発展しているため、ここでは「カワイイ」と表記している。この「カワイイ」がどのような研究状況になっているのかを本稿では考察する。

1 「カワイイ」研究史概略

「かわいい」の研究では清少納言『枕草子』の「うつくしきもの」がよく取り上げられる。ここで表現されている「うつくしい」は「かわいらしい」を意味するという。増淵『かわいい症候群』(1994)、四方田犬彦『「かわいい」論』(2006)で取り上げられると、言語の持つ意味の変遷上の研究では先駆的な役割を果たすようになった。

1943年にコンラート・ローレンツ (Konrad Lorenz, 1903-1989) がベビースキーマ(baby schema)を提唱すると、これをさらに実証するようとする前田實子、入戸野宏、大倉典子の研究がある。もともとは動物行動学から発生した概念であるが、感情をある種、統計から数値化する研究となり、認知心理学的アプローチが進んでいる。最近では真壁智治、工藤保則によりデザイン分野、小原一馬による若者が高齢者を「かわいい」と表現することから「かわいい」という言葉が上下関係とは別に新しい意味持つなど新しい研究も行われている。

しかし、「かわいい」の定義自体も曖昧であり、こうした研究では「少女文化」にも焦点が当てられる。丸文字に焦点を当てた山根一眞『変体少女文字の研究』(1986)、民俗学的観点から分析を行った大塚英志『少女民俗学』(1989)、かわいいグッズに注目した島村麻里『ファンシーの研究』(1991)、キャラクターを通して共感性、児童性、不気味のバランスに注目した斎藤環『キャラクター精神分析』(2011)、ファッションに注目した石田かおり「日本のカワイイ文化

の特質・来歴とその国際的発信について」(2012)など、枚挙に暇がない。

海外でも Sharon Kinsella. “Cuties in Japan” (1995)、Botz-Bornstein. *The Cool-Kawaii* (2011)、Christopher Hart. *Manga For Beginners kawaii* (2012)、Okazaki Manami and Geoff Johnson. *kawaii! japan's culture of cute* (2013)などが発表されている。

「可愛い」→「かわいい」→「カワイイ」(kawaii, cawaii)と、ポップカルチャーでは少女文化の具現化されたものがファンシーグッズとして登場し、消費行動と結びついていることや1974年のハローキティの登場により消費社会において、無視できる状態でなくなった来たことを考えると、研究として「カワイイ」を取り上げることも自然なことである。

2 中村圭子編『日本の「かわいい」図鑑』(2012)



中村圭子編『日本の「かわいい」図鑑』(河出書房新社、2012年4月)は日本の「カワイイ」の原点を竹久夢二に求めるもので、その構成は次の通りである。

- 第1章 大正ロマンの世界に「可愛い」が芽生える—大正～昭和初年代
- 第2章 「可愛いは禁止！」の時代だったけれど・・・昭和10～20年頃
- 第3章 日本経済とともに「かわいい」も成長—昭和20～40年代

第4章 日本の「カワイイ」が世界の「kawaii」へ—昭和50年代

第5章 少女付録の歴史

本書は日本の「カワイイ」文化の原点を探る上でよいヒントになる。第1章の前の「はじめに」には示唆に富む指摘があるので触れておきたい。

「カワイイ」という価値を添えた「ファンシー・グッズ」の歴史をたどります。⁽⁴⁾

「カワイイ」を考察する上で「ファンシー・グッズ」に着目することは意味のあることだ。「カワイイ」がファッションと切り離せない概念である以上、ファッションと関連のあるファンシー・グッズも重要な存在となる。中村は1978年に学研から発売された「ビクトリア・ファンシー」がファンシーという言葉を最初に用いたものではないかと推測している。⁽⁵⁾

3 竹久夢二の「可愛い」

現代で言う「カワイイ」「kawaii」「cawaii」は竹久夢二の「可愛い」とは必ずしも同じではないが、「カワイイ」のひとつの考え方として捉えることができる。特に彼の描くイラストにはこうした要素がある。中村圭子編『日本の「かわいい」図鑑』(2012)では、「可愛い」を以下のように定義している。大正時代には「可愛い」として表現されていた。

「可愛い」とは・・・

「可愛い」とは「未成熟な魅力・美しさ」・・・そしてその属性としてあげられるのが、「曲線的」「小さい」「柔らかい」「明

るい」「軽やか」等。これらは、すべて攻撃には適さない要素であり、「可愛い」とは「攻撃的ではない」という安心感できる親しみやすいものとして大衆に愛されてきました。⁽⁶⁾

中村は同書の中で『『カワイイ』という言葉の変遷』について事例を示しながら次のようにも述べている。

人の容貌や人柄についていう「可愛い」は、以上のように変化しました。100年ほどで、これだけニュアンスの変わった言葉はほかにないでしょう。

しかしグッズについてはこの「可愛い」は、大正から現在まで、肯定的に使われており、その点に変化はないようです。⁽⁷⁾

残念ながら、しぐさや動作については触れられていない。ここで注目すべきは、むしろ「イラスト」や「グッズ」への着目である。特にファンシーグッズである。現在のファンシーグッズの定義は以下の通りである。

ファンシー - グッズ (fancy goods)

小間物。装身具。ごく若い女性向けのかわいらしい装飾品の類。⁽⁸⁾

ファンシーグッズは日本発信のものようだ。その原点は竹久夢二であるという。

竹久夢二が大正3年(1914)に日本橋で開店した港屋絵草紙店は、日本初のファンシー・ショップといってもいいでしょう。この店で販売した品の中心は、夢二が自らデザインした、若い

女性向けの雑貨でした。しかもそのデザインは西洋的な感覚を取り入れたモダンなもので、従来の小間物屋とは一線を画したものでした。⁽⁹⁾

当時は大正ロマンと呼ばれる一種独特な時代感覚があった。竹久夢二と同様に小林かいち(1896-1968)の絵葉書や絵封筒も京都のさくら井屋で販売されていた。

大人の愛好者も存在したでしょうが、かいちの「可愛い」というよりは「耽美」「妖しい」という魅力にあふれるグッズが、少女向けの店で販売されということに時代性を感じます。⁽¹⁰⁾

一般的に可愛い絵、イラストの変遷については、竹久夢二から始まり、中原淳一(1913-1983)、松本かつぢ(1904-1986)、内藤ルネ(1932-2007)を経て、水森亜土(b.1939)が発展させたとも言われている。⁽¹¹⁾

4 ファンシーグッズ

今も昔も「可愛い」あるいは「カワイイ」に共通するものは、「小さい」ということが共通してある。特にファンシーグッズはデザインも含めて、そこには大前提として「小物」である。「カワイイ」を論じようとすれば、人間にしろ、キャラクターにしろ、その大きさはもちろんのこと、表情なども重要な要素であった。中村圭子編『日本の「かわいい」図鑑』(2012)ではこうした表情をもつキャラクターではなく、小さなファンシーグッズへの着目は「カワイイ」の分析に深みを増すことになる。ファンシーグッズに関する研究では島村麻里『ファンシーの研究』(1991)によれば、ファンシーの4大要素を取り上げている。

- ♥小さい
- ♥白っぽい（パステルカラーを含む）
- ♥丸みを帯びた
- ♥やわらかい感じの（12）

「丸みを帯びた」は、前田實子も指摘している通り、ベビースキーマの「可愛らしさ」の基礎特性が「小ささ」「丸さ」「軽さ」を考えると合致している。（13）



5 工藤保則『カワイイ社会・学』(2015)

工藤保則『カワイイ社会・学』（関西学院大学出版会、2015年7月）は自動車のデザインを中心にしたカワイイを論じたものであるが、まず、その内容を紹介しておきたい。

- 第1章 低炭素社会の時代の感性
- 第2章 かわいいの諸相
- 第3章 かわいいの来たし方
- 第4章 もうひとつのカワイイ
- 第5章 カワイイ文化
- 第6章 カワイイクルマ

第7章 超小型カワイイEV

第8章 カワイイの行く末

本書の「第2章 かわいいの諸相」でまず取り上げられているのが日本カワイイ博覧会である。このイベントについてはこれまであまり取り上げられてこなかった。その理由のひとつが新潟で行われたことにあるかもしれない。

第1回日本カワイイ博覧会は2012年3月21日と4月1日に行われた。東京ガールズコレクション同様にリアルクローズファッション、メイク、ネイル等いわゆるファッション系のイベントである。

「新潟では初となるリアルクローズファッションショー」という言葉が示すように、それは、東京コレクションや神戸コレクションのような、大規模に開催される若者ファッションショーを意識したイベントであった。が、それにとどまらず、博覧会と銘打って多くのもを集めて示そうとしたところに、このイベントの特徴がある。実際、「カワイイ博」にはいろいろな「かわいい」があった。⁽¹⁴⁾

イベントの内容について工藤は次のように述べている。

一日のイベントの最後に音楽ライブが行われた。初日はミルキーバニー（益若つばさ）、二日目はきゃりーぱみゅぱみゅであった。きゃりーぱみゅぱみゅはまだ一般的な人気が出る前であったが、彼女らのライブ中ずっと、「かわいい」「かわいい」との声がとんでいた。衣装、メイク、楽曲、MC、しぐさ、それら「すべてがかわいい」ということなのだろう。

「カワイイ博」の来場者の中心は、女子の専門学校生、短大生・

大学生だった。開催日は二日間とも天候はあまりよくなかったし、会場への交通の便もそれほどよくなかったが、約九〇〇〇人の入場者があった模様である。⁽¹⁵⁾

今後このイベントについても要チェックである。

「第3章 かわいいの来たし方」では、「かわいい」に関する研究の嚆矢を山根一眞『変体少女文字の研究』(1986)として紹介している。山根は京都の直指庵の参拝者が自由に書くことのできるノートをヒントにまとめたものである。山根によればこの変体少女文字が現れるのは1974年であるという。つまり書いた人物は1959年生まれということになる。その後、島村麻里『ファンシーの研究』(1991)が登場するが、ファンシーグッズに注目した研究で、ファンシーの4大要素として「小さい、白っぽい、丸い、やわらかい」⁽¹⁶⁾を取り上げている。その後さらに社会学的視点から研究が進んでいる。変体少女文字が出現した1974年に拘ってみると、この周辺にはどのようなことがあったであろうか。1974年はサンリオのファンシーショップ1号店開店、ハローキティの誕生の年である。「かわいい」と「ファンシー」は時には同義語として使われることが多いだけに今後この2つは注目すべきものである。奇しくも竹久夢二もファンシーグッズ販売に係り、自身も挿絵画家として沢山の作品を生み出して、また少女マンガへの影響は周知の通りである。ハローキティの出現によってファンシーグッズ以外にキャラクターの「カワイイ」が全面に登場したことになる。「カワイイ」についてはデザイン研究からのアプローチもあり、真壁智治◎チームカワイイ『カワイイパラダイムデザイン研究』(2009)などもある。

エピローグ

竹久夢二の活躍した大正ロマン時代は、1897年に誕生したと言わ

れる女子の袴もすっかり定着し、西洋趣味のものを取り入れた「可愛い」の時代であった。竹久夢二の描いた少女達の姿は現在のように単にカワイイという様相ではなく、そこにはどこか悲しげな様相さえある。大正時代は「少女の時代」とも言われるように、少女歌劇団等などが結成されたのもこの時代である。戦後、1974年のハローキティの誕生は、高度経済成長、欧米へのあこがれなど、日本が欧米を強く意識した時代であった。その後の「カワイイ」はマンガやアニメのキャラクターにより表現され、やがてファッションによる「カワイイ」が爆発的な人気を博すようになった。ここには少女の果たした役割は大きく、現在ではポップカルチャーとして発信型の日本文化のひとつにまで発展した。斉藤環『キャラクター精神分析』(2011)によれば、キャラクターには共感性を持つものと⁽¹⁷⁾、児童性を持つものがある。⁽¹⁸⁾「カワイイ」にはすでに述べたベビースキーマからの考察もあり、養育反応、すなわち、「守ってあげたい」という感情が大きく影響している。

現在では、グッズ等においては概ね「小さい」「白っぽい」「丸みを帯びた」「やわらかい感じの」を中心に、キャラクターにおいては動き、場合により発せられる声(質)などから、「カワイイ」の対象となっていることは否定できない。今後、カワイイを感性との関係から論じる研究の成果等を含め、総合的に考察していくことで「カワイイ」の本質に迫れるのではないかと思われる。

注

(1) 筆者はこれまで「カワイイ」については以下のように発表して来た。

「現代美意識としての『カワイイ』」(『武蔵野学院大学日本総合研究所研究紀要』第8輯、武蔵野学院大学日本総合研究所、2011年3月)、103-110頁／「1 カワイイ」(「第5章 周辺概念」の一

- 部、『オタク文化論』イーコン、2012月1月) 131-146頁／
「kawaiiの行方」(『武蔵野学院大学日本総合研究所研究紀要』第9
輯、武蔵野学院大学日本総合研究所、2012年6月)、471-477頁。
なお、『資料から見た「カワイイ」』(多生堂、2017年1月)を入
稿中である。本稿はその資料を基礎にして発表するものである。
- (2) 筆者は2016年5月22日に観覧した。展示会用のカタログや
解説書のようなものは販売されていなかったが、展示の解説文は
概ね中村圭子編『日本の「かわいい」図鑑』(2012)よりのもの
が多かったため、同美術館で購入した。
- (3) 「竹久夢二美術館」
(<http://www.yayoi-yumeji-museum.jp/yumeji/exhibition/now.html>) (2016年5月23日アクセス)
- (4) 中村圭子編『日本の「かわいい」図鑑』(河出書房新社、2012
年4月)、p.4.
- (5) Ibid., p.122.
- (6) Ditto.
- (7) 中村圭子編『日本の「かわいい」図鑑』、p.125.
- (8) 「ファンシー - グッズ (fancy goods)」
(<https://kotobank.jp/word/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%83%B3%E3%82%B7%E3%83%BC%E3%82%B0%E3%83%83%E3%82%BA615273>)(2016年5月23日アクセス)
- (9) 中村圭子編『日本の「かわいい」図鑑』、p.7.
- (10) Ibid., p.12.
- (11) Ibid., p.122.
- (12) 島村麻里『ファンシーの研究』(ネスコ、1991年3月)、p.19.
- (13) 前田實子「Baby-schemaに関する実験的考察—母性心性の触
発刺激を中心に—」(『武庫川女子大学幼児教育研究所研究紀要』第
2号、1983年3月)、p.9.

- (14) 工藤保則『カワイイ社会・学』（関西学院大学出版会、2015年7月）、p.10.
- (15) Ibid., p.12.
- (16) 島村麻里『ファンシーの研究』、p.19.
- (17) 斉藤環『キャラクター精神分析』（筑摩書房、2011年3月）、p.80.
- (18) Ibid., pp.81-82.

キーワード：可愛い、かわいい、カワイイ、竹久夢二、ファンシー

* 追記

「カワイイ」に関する資料集を現在校正中で、2017年1月には『資料から見た「カワイイ」』（多生堂）を出版の予定である。